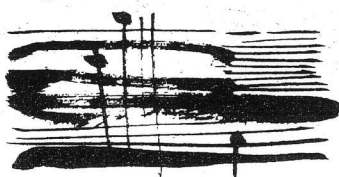


展 望



山元 眞

これからの教会、二十一世紀の教会の理想の姿は、どのようなものだろうか。未来の教会を担っていく子どもたちや青年はどのように考えているのだろうか。彼らに聞いてみると、そこには福音に基づく教会の姿が見えてくる。

みんなの教会

「どんな教会だったらい？」というテーマで小、中学生に作文を書いてもうった。「だれでも来れる教会」「友だちを誘える教会」「楽しい教会」「みんなが仲良しの教会」「車いすの人が来れる教会」「お年寄りが来れる教会」…。

彼らは、より具体的に提案する。

「神父はもっと分かりやすく説教をする」「もっと短くだれでも分かるように神さまのことを話してほしい」「車いすの人のためにスロープはあるけど、トイレがないので来れない。トイレがあったらいい」「くつを脱いだり履いたりするのはお年寄りにはきつい。そのまま教会に入れたらいい」「教会に入るまでに段差があるので、それをなくさない」と車いすの人が

教会に入れない」「聖堂がもっと広かったらいいのに。そしたらもっとたくさんの方が来れる」「みんな、どうしてうれしそうに顔をしていないんだろっ」…。

青年たちにも聞いてみた。「みんなが来れる教会がいい」「人の悪口を言ったり、非難するのはやめてほしい」「開かれた教会づくり、と言っているが、言っただけで全然開かれていない」「会議ばかりして、何も具

体的に決まらない」「今の教会には若者は来にくい」「若者の悩みに答えるような話を聞きたい」…。子どもたちも、青年たちも、教会がもっとみんなのものになることを望んでいる。

「みんな」は「みんな」

このところ、主日の第二朗読で聖パウロのコリントの教会への手紙が読まれている。教会にはいろいろな

すが言つよつに「みんなちがって、みんないい」のである。

みんなが救われなければならない。自分だけ、私だけという「部分的な発想」は教会にふさわしくない。主日のミサに参加できる人だけが教会のメンバーではない。ミサに来れない人、来ない人でさえ教会の「みんな」なのだ。この発想に基づいていろいろなことが考えられるならば、教会は「みんなが平和で、喜びに満たされた集い」になるのではないだろうか。

「みんな」という発想

人において、各自にはさまざまな能力や役割が与えられている。それは、一つの霊によって、一つになるために与えられているもので、その違いが分裂の元となってはならない、とパウロは諭す。さらに、教会は「キリストの体」と言つ。そしてその「体」では、弱く見える部分や格好が悪いと思われる部分、見苦しい部分がかえって必要だと言つ。詩人金子みす

開かれた教会

「開かれた教会」という言葉、表現を嫌う人もいるようだが、教会は本来、開かれたものである。神は教会を通して人々を救いに招いている。そのために、私たちは洗礼の恵

みを受け、人々に救いの喜びを告げ知らせるよつに、と呼ばれた。教会はこのよつに「呼ばれた」人たちの集いである。私一人が、私一人のために呼ばれたのではない。また、もう一人の人を呼ぶために呼ばれているのである。こつして救いの輪は教会を通して広がっていく。

子どもたちや青年が「みんなの教会」を望んでいることは、教会の本質をついている。彼らが彼らなりに感じている「救いの喜び」を他の人たちにも感じてほしいと思つているのだ。これが福音宣教の土台だと思う。教会にはだれでも来てよいし、だれでも神から呼ばれている。このことを今ある教会がよく理解し、だれでも受け入れる雰囲気があるならば、教会は「みんなの教会」になり、福音宣教の使命を喜びをもって果たしていくことができるだろう。そのためには、神に呼ばれている私たちが、もっと、神と人々に心を開かなければならないと思つ。

(福岡教区司祭)